

氏 名 お 小 椋 た み 子  
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)  
 学位記番号 論 文 博 第 249 号  
 学位授与の日付 平 成 5 年 3 月 23 日  
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当  
 学位論文題目 初 期 言 語 発 達 と 認 知 発 達 の 関 係 に つ い て の 研 究

論文調査委員 (主 査)  
 教授 平野俊二 教授 清水御代明 教授 蘭田 担

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は初期言語発達と認知発達の間係を、健常児、自閉性障害児、ダウン症児を対象に検討したものである。とくに E. Bates とその共同研究者が提起している「言語の特定領域が認知の特定領域と特定の時期に関係がある」という局所相同説 (local homology model) を中心に、幼児の初語発生前段階から、二語発話に至る発達を検討する。全体は6章からなる。

第1章では、初期発達における言語と認知の間係について、これまでに提起されてきた主要な理論の展望が行われる。まず、言語獲得の前提となる認知機能が言語発達に先行すると主張する認知説と、言語と認知は、基底にある共通の構造が関与し、両者が対応あるいは平行して発達すると考える相関説の立場が説明される。あわせて、相関説に基づく局所相同説の特徴が他の説と比較される。その上で、論者は、認知発達の測度としてとりあげられてきたPiagetの感覚運動知能の6領域(手段-目的、ものの永続性、因果性、空間関係、対象関係把握のシエマ、模倣)と、それらを操作的に測定する課題の内容を吟味し、意図のコミュニケーションと関連する認知速度、言語と関連する認知測度の実証的研究についての文献を展望する。さらに、子どもの自発的活動である遊び(事物操作活動)を認知測度としてとりあげることの重要性が論じられ、遊びと言語測度との関係についての諸研究が論評される。以上の文献展望を踏まえて、本論文では初期言語発達として語彙と統語的側面を、認知発達として感覚運動知能の手段-目的、因果性、ものの永続性、空間関係(結合課題)の領域と、子どもの自発的活動である遊びをとりあげる論拠が示される。

第2章では、10-21ヶ月児の親とのコミュニケーションについて、質問紙と観察に基づき、言語発達の段階を指示語の異なり語数によって、一語発話の出現、増大、定着の3段階に区分し、認知測度との関係が検討される。一語発話出現期には、既得の感覚運動的な喃語に意味が付与され、音声-意味の対関係が成立するとともに、認知面では、目的達成と手段という対関係の認識が成立する。一語発話増大期には音声に一定の慣用的な意味が付与され、語彙の増加がみられ、認知面でも事物に対し用途にあった意味が付与され、より明確な事物間の認識が可能になる。この時期に音声シンボル、身振りシンボルを獲得し始め

る。一語発話定着期には子どもは各音声を表す事物、事象の心像を喚起できるようになり、認知面でも心像を保持したり、事物を他のものに見立てたりすることが可能になる。以上の結果より、局所相同説が支持されると論じられた。また、遊びについては、一語発話出現、増大、定着のいずれの言語測度とも有意な偏相関（生活年齢一定）があり、一語発話表出全体の発達と関係していることが示される。

第3章では、健常に発達している4児を8ヶ月から二語発話出現まで約3週間間隔で観察し、言語の獲得と感覚運動技能との関係を、時間的に対応づけて明らかにする。言語測度には、初語、指示語、指示代名詞、語連鎖、二語発話の五つの言語指標と、非存在を表すことば、発見・成功を表すことば、の出現時期をとる。4児でそれぞれの言語測度の出現時期は異なるが、それぞれの出現時期に可能となる認知課題には、共通性がみられる。すなわち、初語の出現期に、音声一意味の対関係、事物間の対関係が成立する。指示語の出現には、指示する事物、事象の視覚心像、および、大人から発せられた音韻パターンの聴覚心像の保持が必要となるが、認知課題において目的達成の手段としての事物、人、方法の媒介物に気付くとともに、それらの使用が可能となる。指示代名詞の出現期は語彙の急増期とも一致し、全体の中から部分を取り出す能力に関する認知課題がこの時期に達成される。非存在や発見・成功の特定の意味をもつことばと認知課題の間に同期的な関係がみられ、論者はそこに、子どもの、言語的に表現しようとしていることばについて、概念の発達を指摘するとともに、これらの諸事実が、局所相同説を支持するものであると主張する。

第4章では、第3章でとりあげた4児を生産的二語発話出現まで観察し、言語の獲得と遊びの関係を明らかにする。言語指標の初語、指示語、指示代名詞、語連鎖、非生産的二語発話、生産的二語発話を取りあげる。言語指標と遊びの下位カテゴリーの出現時期に個人差があるが、遊び、言語、および、遊びと言語をこみにした出現時期の順位は、4児で高い一致度がみられる。また、言語生産の六つの指標に対応して出現した遊びの内容は一致する。初語の出現は機能的関係づけや対象の大小関係の理解の出現と、指示語の出現は事物への命名行為の出現と、指示代名詞の出現は想定や代置の象徴遊びの出現と、それぞれ対応がみられる。非生産的二語発話と二つのテーマの結合した振り遊びの出現が3児で同時期に、プランのある遊びは3児で非生産的二語発話の出現の少し後に生起し、その後引き続き、生産的二語発話が出現する。これらの観察から、言語指標に関連する遊びのカテゴリーが、四つのクラスターにまとめられ、言語と遊びの発達の時間的対応が明らかにされた。

第5章では、3名の自閉症障害をもつ幼児の縦断観察（A児：2歳－4歳5ヶ月、B児：1歳8ヶ月－4歳2ヶ月、C児：2歳1ヶ月－4歳3ヶ月）から、身振りと初期言語行動、象徴遊び、感覚運動技能の関係が検討される。これらの子どもは、手段一目的、因果性、ものの永続性で感覚運動知能のVI段階に達していて、結合遊びの課題もでき、感覚運動技能に欠陥は無いにもかかわらず、身振り、言語、象徴遊びに欠陥が示される。A児において3歳7ヶ月時に、対象指示語と指さしなどの身振りが出現するが、健常児でことばの出始めに発せられる幼児語、擬音語の出現はわずかで、成人語の形式の対象指示語が出現する。言語と象徴遊びの関係については、言語の発達とさまざまな振り遊びや、見立て遊びの出現の時期に関する対応が明らかにされる。この観察を通じて、論者は、自閉性障害児において、健常児と類似した言語と遊びの平行発達がみられると論じる。さらに、局所相同説の観点から、これらの事実は、初期言語発

達、象徴遊び、社会的相互交渉性の発達、密接に関係することを示すとの見解が提示される。

第6章では、16-54ヶ月の米国のダウン症児を対象とし、象徴化と系列化の側面から、言語と遊びの関係をみる。ここでは、言語理解と無いものを有ると想定する存在想定や、無い属性を付与する属性付与などの象徴遊びの間に、また、言語表出と他の事物を見立てる代置の象徴遊びの間に、それぞれ高い偏相関（生活年齢一定）が認められる。他方、系列化については、系列をなした遊びに含まれるシンボルの最高数と、最高発話長の間最大の間隔がみられた。論者は、これらの傾向から、言語においても遊びにおいても、シンボリックなレベルでの認知と、複数の行為の継時的な結合が平行して生起しているという。さらに、ダウン症児の言語表出の遅れや、サイン言語の使用についての考察が行われる。

第7章では、本研究の結果は、特定の時期に言語と認知の特定領域が関連しているという局所相同説を支持するとの、論者の見解が述べられる。また、感覚運動性知能、自発的な遊びと言語獲得の関連についての考察から、障害児の言語発達に、認知的要因以外に、他人との感情的接触やコミュニケーションが重要であることが指摘され、あわせて、言語獲得の遅れている子どもの指導について、論者の意見が述べられる。

### 論文審査の結果の要旨

乳児期から幼児期前期にかけて達成される言語の獲得は、言語以外の心理機能の発達、とくに認知の発達と密接な相互関係を維持しながら進行する。この相互関係をめぐって、対立的な二つの理論が存在する。その一つは、全体構造としての感覚運動知能全般が、言語の発現とその後の発達を規定しているという、ピアジェ学派の段階説に基づく理論である。他の一つは、E.ベイツを代表とする局所相同説（local homology model）と呼ばれるもので、言語の獲得に、感覚運動知能を形づくっている下位領域の特定のものが、特定の時期に限って、関連していることを重視する立場である。これらの見解に強い理論的関心が持たれているにもかかわらず、現段階では、その妥当性については十分に実証的な検討が行われていない。

本論文は、この実情に鑑み、主として局所相同説の立場から、感覚運動知能の下位領域の発達と、言語の初期発達の関連を実証的に検討した論者の精力的な研究に基づくものである。

本論文の第一の特徴は、健常児だけではなく、論者が携わってきた発達障害児（ダウン症児と自閉性障害児）をも対象として、言語と認知の関係を検討した点にある。従来、発達理論の妥当性については、健常児を標本として検討されることが多かったが、本研究は、健常児に加えて発達障害児の標本についても検討が重ねられた。比較に際して言語の指標や遊びの象徴化の程度など、考慮すべきさまざまな留意事項への配慮も、今後の研究にとって、一つの指針を与えた意義は大きい。

第二の特徴は、この論文が、横断の実験観察と縦断の実験観察の両方法をとおして、言語と認知の発達相互関係を検討したことである。これら両方法の併用は、早くから発達研究にとっての重要性が認められてきてはいるものの、その実施に多くの制約を伴うため、両立させることは容易ではない。この難点を克服して、包括的な検討を推進した論者の解析は、きわめて貴重な成果である。

本論文の中でとくに注目されるのは、論者が認知の発達の測度に、いわゆる感覚運動技能に加えて、幼児の積極的な遊びを取り入れたことである。これにより、つぎのような貴重な資料を得ることができた。

健常児では、特定の時期に、言語の特定領域と感覚運動技能との間に密接な関係が見られるが、その関係は自閉性障害児には見いだされなかった。ところが、シンボルを形成・操作する領域と考えられる遊び(事物操作活動)については、健常児、自閉性障害児、ダウン症児とも、出現の時期は異なるが、いずれにも言語と遊びの間に密接な関係が認められた。すなわち、指示語の出現と事物の慣用操作の間に、あるいは、言語表出における語彙の急増と、ものを他のものに見立てる代置の象徴遊びとの間に、健常児、発達障害児を問わず、相互に関連する発達の経過を辿ることが示された。

本論文において明らかにされた観察および実験結果が、認知と言語の発達に関する局所相同説を支持するものであるとの論者の見解は、その論拠の多くが事象の同期的発現による相関に基づいており、なお今後の検討を要すると思われるが、局所相同説の可否は別として、論者が提供した知見は、今後の研究にきわめて有用である。また、本研究で初期言語獲得の基盤となっていることが確かめられた、事物操作活動としての遊びは、健常児、発達障害児の発達水準を診断、評価するための発達尺度へと発展させる可能であり、言語獲得の遅れの原因、予後を判定する有力な測度となる、との論者の提案にも大いに期待したい。

本論文の論旨の展開に、やや明快さを欠くところが散見されるのは惜しまれるが、健常児と障害児の長期にわたる縦断的実験と横断的実験を通じて得られた知見の意義は、十分読みとることができる。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。

平成5年1月11日、調査委員3名が試験を行った結果、合格と認めた。